『通信』II 第六号

目次

ごあいさつ 1
2018 年秋季例会 2–5
2019 年春季例会 6–9
2019 年秋季例会 9–13
問い合わせ先・連絡事項 13–14

ごあいさつ

『通信』II、第六号をお届けします。コロナの終息は見えず、厳しい状況が続いておりますが皆様いかがお過ごしでしょうか。第六号のお届けが大変遅くなってしまったこと、深くお詫びいたします。延期になっておりました 2020 年度春季大会は、2021 年 3 月 7 日（日）にオンラインで開催致しました。この模様は次号でお知らせいたします。

今回は、2018 年秋季例会、2019 年春季例及び秋季大会の模様をお伝えします。

なお、本誌に掲載しております報告者の所属は報告時のもの、執筆者の所属は『通信 II』第六号発行時のものです。

2018年秋季例会報告

2018 年 12 月 16 日（日）に JEC 日本研究センター江坂（旧：大阪研修センター江坂：会議室 C）にて、2018 年秋季例会が開催されました。

第一部は、安原義仁、ロイ・ロウ著『「学問の府」の起源–知のネットワークと「大学」の形成』（知泉書館、2018 年）合評会が、三時眞貴子氏（広島大学）の司会のもと行われました。最初に著者である安原義仁氏（広島大学名誉教授）が「「学問の府」の起源をたずねて」というテーマで報告され、長谷部圭彦氏（早稲田大学）と中村勝美氏（広島女学院大学）からコメントをいただきました。

第二部では、統治性・規律化論セッションが、北村陽子氏（名古屋大学）の司会のもと行われました。岡部造史氏（熊本学園大学）が「19 世紀フランス社会福祉における統治性–児童保護を中心に–」、山名淳氏（東京大学）が「ビルドゥング・アーキテクチャ・ゲヴァルト–教育史記述における規律論の限界を超えるための問題枠組の試み–」というテーマで報告され、コメンテイタとして岩下誠氏（青山学院大学）が登壇されました。

詳細は以下の報告の通りです。ご参照ください。

合評会『「学問の府」の起源—知のネットワークと「大学」の形成』に参加して

土井貴子（岡山理科大学）

2018 年 7 月に知泉書館より出された安原義仁，ロイ・ロウ著『「学問」の府の起源—知のネットワークと「大学」の形成』の合評会には多くの方が参加され，活発に議論が展開された。本書は，「大学」(university)以前の，古代・中世文明圏に存在した「学問の府」の設立背景，動機目的，そこで探求された知識とその伝播・移転を可能な限り関連づけて描き出すことに挑戦した学術書である。

はじめに著者である安原義仁氏より本書ができるまでの経緯とめざしたところが語られた。本書の特徴の一つは，イギリス近代史，教育史が専門である二人の著者が，純粋な知的探求からスタートした研究である点にあろう。そのため，アラビア語文献や漢文への研究ツールをもたないことから一次史料にはあたっていないが，英語による研究の蓄積や日本人による一定の先行研究に基づく研究書となっている。本書は，英語で先に出版された The Origins of Higher Learning: Knowledge networks and the early development of universities の「日本語版」であり，日本語で書か

れた先行研究を用いて日本人読者を対象に書き下ろされた。これから研究をはじめる大学院生など未来を切り開く若い世代を読者層に据えている。

また本書では「虫の眼」と「鳥の眼」の両方の視点を意識されたという。「学問の府」がどこにあったのかどのような組織であったのかといった「点」への関心と，「学問の府」で探求・蓄積された知の移転・伝播という「点」と「点」を結ぶ「線」への関心の両方を意識されている。それは，著者二人の関心の相違によるものでもあったであろう。著者たちの研究スタイルは，本書のもう一つの特質である論文集ではない共同研究の成果という点にもかかわっている。著者たちは，1982 年に学会で初めて出会い，以降，継続的に交流を図り，2010 年に共同研究がスタートしてからは世界各地で年に数回直接会って議論し，本書を作り上げていった。本書は，議論を重視し，議論しながら知を探究するというまさに共同研究によって生まれたものである。

続いて，2 人の評者からコメントと論点が示された。そのうちのいくつかを簡単に紹介したい。イスラーム史の長谷部圭彦氏からは，本書が扱うテーマの一つ，知識の伝播・移転とその歴史的条件についてと，本書の意義について指摘があった。著者は 12 世紀の一大翻訳運動が展開された条件として多宗教・多言語社会に着目したが，それは当時の社会では当然ことでありむしろなぜこの時期だったのかを検討すべきという指摘であった。当時の社会をどのようにとらえて考察するのか，他にも先行研究で論争的な点や複数の知見がある場合にどれをとりあげるのかといったその地域を専門とする評者からの指摘であった。紹介したいもう一つの論点は，本書が地域的なバランスや専門を超えた「大まかな見取り図」を描く研究であることを評価しつつも，既存の先行研究を総合して析出する新しい知見を示す必要性についてであった。これを受けて，研究のオリジナリティや専門学会レベルでの新知見の重要性とそのことを強調しすぎることへの懸念，学術書で一つにまとめることの意義などが議論された。

二人目の評者は，イギリス大学史の中村勝美氏であった。中村氏は，本研究が真の意味での共同研究の成果であること，教育の営みをイニシエーションとしての教育から取り上げていた著者の歴史への取り組み方をあらわすものであること，日本での古代ギリシア研究，イスラーム研究の蓄積を知る機会となったことを評価した。また，本書は古代・中世文明圏を「学問の府」から読み解いた研究であると評価する。「学校と教育という窓を介して社会と国家を捉え，国家と社会のあり方から教育の構造と機能を把握しよう」(叢書・比較教育社会史の窓より)とする比較教育社会史研究会で共有されてきた観点が本書においてもその特色となっていると考える。著者への質問として最後に中村氏は，本書が古代ギリシアからイスラームを経て中世大学へとつながっていることを知識の伝播・移転で論じているが，東アジア文明圏がどのように位置づくのかという論点を提示した。東アジア文明圏にあった「学問の府」やそこで探究された知識がどのように伝播し，中世大学にいかなる影響を及ぼしたのかは，今後につづく課題であろう。

フロアからも多くの質問やコメントが出された。その一つを紹介したい。higher learning をめぐってである。著者は，大学(その組織形態，制度)がヨーロッパ中世社会固有の産物であるという見解が定説としての有効性を失っていないと捉えており，「大学」とは異なるそれ以前の古代・中世文明圏に存在し，体系的な知の探究が行われた「学問の府」(seat or centre of higher learning)をとりあげた。その際，「学問の府」を高等教育(higher education)とはしなかった。教育と研究の一体性という点から learning を用いていた。本書で取り上げられたのは古代・中世文明圏をささえた体系的な知と知的探究である。そこから，知の体系化につながらなかった，文字化されなかった知や，口承等により伝播した知といった視角が埋もれてしまう点についての質問がなされた。著者のいう教養の捉え方につながる指摘であり，知の探究や伝播における文字化され翻訳された知とそうでない知との関係についての指摘であった。

最後に，著者がこの合評会でのべられた「自分の研究がどのような位置にあるのか理解するという成果があった」というコメントについて考えたい。本書の終章で著者は，古代・中世の知の探究者たちによる知の探究に対する姿勢や態度から今日の知の探究への姿勢や学問のあり方を考えることについて論じている。「専門分化・細分化による学問の発展・高度化の一方で見失われたもの」はなかったか，「純粋な知への姿勢・態度は……「全体」への配慮を欠いた個別知の肥大化現象をもたらすということはなかったのだろうか」という問いである。著者自身が本書でこうした問いに挑戦したともいえよう。本書は，なぜ古代中世文明圏に存在していた「学問の府」

が現代の大学へと発展することはなかったのかという著者たちの抱く大きな問題へとつながるものであり，まずは「各文明圏における「学問の府」の歴史的展開を可能な限り相互に関連づけながら総合的に通観」しようと試み生まれた成果である。まさに著者たちの「知識それ自体のための知識の探求」「実務や実益に捉われないところでの知の探求」からうまれたものであり，自らの研究の位置を理解できる知の探究であった。合評会では著者，評者，そしてフロアの参加者から多様な論点が提示され，議論が展開された。いまを考える機会となった。

第二部「統治性・規律化」セッションに参加して

中込さやか（立教大学GLAP運営センター）

第二部「統治性・規律化論セッション」は北村陽子氏（名古屋大学）の司会のもと、岡部造史氏（熊本学園大学）と山名淳氏（東京大学）を報告者に、岩下誠氏（青山学院大学）をコメンテイタに迎えて開催された。岩下氏いわく、本セッションは叢書・比較教育社会史（昭和堂、2003～2014）の意義を改めて問い直す中で、国民国家論・再生産論・規律化論などの比較教育社会史上の大きな枠組みを振り返るために企画されたという。

岡部氏の報告「19 世紀フランス社会福祉における統治性―児童保護を中心に―」では、『フランス第三共和政期の子どもと社会』（昭和堂、2017）で論じられた「統治性」・「統治権力」の概念を再整理したうえで、児童保護の他の社会福祉の領域―具体的には 19 世紀前半フランスの保育所と公益質屋の事例―が検討された。まず、上記の著作は「生権力 bio-pouvoir」（フーコー）に関する一つの史的考察として、統治権力としての児童保護に着目し、子どもを取り巻く私的領域での統治権力の介入・管理の多様性や流動性を指摘した。児童保護の領域では、統治権力の私生活へ介入にあたり公権力と慈善事業（民間）と間で複数の論理が対立したが、最終的には公権力の優位が確立していった。統治権力は地域レヴェルで自律性を持って変容し、それらの変容が全国レヴェルでの統治権力の担い手、対象、形式、様態などの変容や構築に寄与した。統治権力の担い手―国家・地方自治体・慈善事業―の関係は複雑であったが、互いに相互補完的な独立したネットワークの中で、常に不安定かつ流動的な形で、試行錯誤を繰り返しつつ、時として権力側の思惑を超えて展開していった。

次に、保育所と公益質屋の事例は、救貧政策による都市貧困労働者の道徳化・規律化という通常の図式にあてはまらない、規律化とそれに反する効果が相矛盾して実践されていた様を示した。保育所（託児所）は、工業化後に母親の家庭外労働が増加したことで生じた子育ての問題に対応する形で、19 世紀後半に増加した。統治権力としての保育所は、労働による母親の規律化を行いつつ、母親が家庭内で子育てをしないという近代家族規範からの逸脱をも認めることとなった。公益質屋は、国家が介入しない自由主義社会で金融機関と福祉機関の二面性を持った。統治権力としての公益質屋は、返済義務のための節約や貯蓄を通して民衆僧の「道徳化」を担う一方、その利用のしやすさは散財と窮乏や預かり証をめぐる不正取引の横行も招いた。

山名氏の報告「ビルドゥング・アーキテクチャ・ゲヴァルト―教育史記述における規律論の限界を超えるための問題枠組の試み―」は、自らを「規律化論世代」と定義し、これまで教育学（教育哲学）における研究活動を「統治性」・「規律化論」の観点から自己省察しつつ、＜都市／田園＞とアーキテクチャをめぐる著作 3 作（『ドイツ田園教育舎研究』、風間書房、2000;『夢幻のドイツ都市』、ミネルヴァ書房、2006:『都市とアーキテクチャの教育思想』勁草書房、2015）を基に、教育史学との関連性や今後の研究の可能性を述べた。報告ではまず、統治・規律・「ゲヴァルト Gewalt」の三者の関係を考えるにあたり、外的ゲヴァルトをもたらす統治の次元（中央管理型／ネットワーク型、コントロールの強弱）と、内的ゲヴァルトをもたらす規律（自己統治）の次元の組み合わせを整理し、教育学における個人の＜自律性＞を考えることを求めた。次に、人間と文化のダイナミズムの分析概念として「ビルドゥング Bildung」を取り上げた。「ビルドゥング」は人が＜人間＞になる変容およびその過程において得られたものの総体を意味し、人間と環境（人間を取り巻く自然、文化などあらゆる事物）の相互作用の中での人間形成および環境形成を考えるにあたって有効な枠組みである。その上で、近代都市や田園という空間上の文化的構築物（アーキテクチャ）が統治／規律には果たした役割のうち、教

育の空間（アーキテクチャ）として「ビルドゥング」をいかに促進／制約したかを問うにあたり、特に「田園」が果たした役割に着目し、具体的にはドイツ田園教育舎と田園都市ヘレラウを取り上げた。

「田園」は近代都市と対置されつつ、その価値が都市の時代に見いだされた点では近代に＜発見＞されたものである。20 世紀転換期の新教育運動の中、ドイツ田園教育舎は「子供中心主義」の自然志向の学校実践を行う典型的な例として賞賛と批判の的となった。「田園」型教育施設は、解放の地としての「田園」であると同時に、保護・監視される＜見通し性＞構造ーしかしそこには死角もある―を持った。山名氏が強調するところでは、「田園」は「アジール Asyl」であり、文化批判の産物でありながら文化自体でもあり、近代がおざなりにしてきた要素でありながら近代の発明でもあり、システムの外部でありながら内部でもあるなど、両義性と複雑性をもつアーキテクチャであった。田園教育舎は教育に特化された施設であったが、それを一部に組み込んだ田園都市は、人間の生活全体を空間構成によって改善しようとする「生活改良」運動に基づく教育的アーキテクチャであった。1907 年に設立された田園都市ヘレラウで形成された近代の「自由空間」はアジールとして、また統治の装置と両義的に機能した。

コメンテイタ・岩下氏は、教育史が 1980～90 年代の規律化論から 2000 年代以降の統治性研究にシフトしていった大きな流れを提示したうえで、両氏の研究がその中で卓越した成果を示したと高く評価した。岡部氏の報告については、地方レヴェルの児童保護の実践が全国レヴェルの家族政策へ「屈折した」影響を与えたことを実証した卓越した「統治性」研究であり、「統治性」研究と政治史の接合の可能性をも示すと評価した。その上で、政党政治・階級政治・イデオロギー批判を導入すると、「統治性」研究や規律化論から失われるものは何かと問うた。これに対し、岡部氏は地方政治のあり方に英仏で違いが見られる点や、政党などからは見えない、統治者の意図と異なる児童保護の根底の流れが地方レヴェルの分析から明らかとなる点を指摘した。

続いて、岩下氏は山名氏の報告がフーコー的権力論を「新教育」研究へ応用し、教育における時間・空間・人間関係の中で引き起こされる対立と葛藤が常態化されるという矛盾を指摘した点を評価した上で、「ビルドゥング」概念が教育学の分析概念として有効であるかを問うた。山名氏は、「ビルドゥング」概念は「教育」のもつ意味を再定義するために有益な概念であることや、政党・イデオロギーに回収しきれない細かな人間関係に着目することの重要性を再強調した。

その後、フロアも交えて、教育と「統治」の関係性について活発な質疑応答が行われた。例えば、教育世界では意図と需要にズレが生じることがままあるが、教育は方向的であるから統治となりうるのではないか。あるいは、統治をする主体は政治権力や教育者だけではなく、構造や差異、環境も教育をする主体となりうるのではないか。

筆者は文学部の西洋史からイギリス女子教育史に興味を持ち、女性史／ジェンダー史の枠組みで研究を行ってきた。両氏とはこれまでの研究の軌跡が異なるが、両報告の研究アプローチや結論は筆者の現在の問題関心と重なる部分もあり、興味深いものであった。両氏の報告は広義の「教育」における統治権力の論理や性質、担い手同士の関係性の揺らぎ、統治者の意図と実践のずれなど、「教育」における様々な両義性・複雑性・流動性を指摘し、時間・空間・人間関係（ネットワーク）をより細かに分析する必要があることを強調していたように思われる。2010 年代以降の英語圏の教育史では、広義の「教育」の時間・空間・ネットワークにおける一直線でない不確定で複雑で繊細な変容や試行錯誤を、それ自体として理解し、理論化しようとする動きがおこっている。「地下で多種多様な小道に沿って多方向に成長する、複雑で、単線的ではない根のシステム」を示す「リゾーム rhizome」をネットワークや教育の伝播にあてはめる分析や、「雑多なコネクションをつくりうる付近位置な構成要素の統一体」であるアッサンブラージュ（ドゥルーズ、ガタリ）への着目などはその一部である。（ジョイス・グッドマン著、香川せつ子・内山由理・中込さやか訳 (2017)「イギリスにおける教育史研究の潮流：ジェンダー・トランスナショナリズム・エージェンシー」『西九州大学子ども学部紀要』8 号、100-101 頁）。今後の研究の進展により、国民国家論・再生産論・規律化論などの比較教育社会史上の大きな枠組みが問い直されることを楽しみに待ちたい。